

「愛顔(えがお)あふれる愛媛づくり」

平成26年度「知事とみんなの愛顔(えがお)でトーク」知事講話

開催日時：26.6.20(金)

開催場所：宇和島市役所

どうも皆さんこんにちは。今日は平日ということで皆さんお忙しいと思いますけれども、宇和島圏域の「知事とみんなの愛顔でトーク」に御参加をいただきまして誠にありがとうございます。この会は、ある程度の広域のエリアにおけるまちづくり、あるいは、産業、福祉、いろんな分野で御活躍している人達と率直な意見交換会をするということで、その中から政策に反映していくヒントをいただくようなことも考えて実施をしてきております。今日は限られた時間ではありますが、様々な意見交換ができればと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。

【イベント開催の意義】

この宇和島圏域は、高速道路の延伸を受けて、この機会を利用して地域に活力をもたらすきっかけができないかということで、2年前に南予いやし博を実施いたしましたけれども、その時に地域住民の皆様により自主的に様々な企画を立ち上げていただきまして、目標は70万人の見込みということを目指していたんですが、結果的には77万人の入込みがございました。南予のちょっと離れていたところの魅力というものを新たに確認、発見していただいた方を増やすきっかけになったのではなかろうかと思っています。そのあとも、いやし博で生まれたいくつかのイベントが継続して取り行われてまして、中には雇用につながったり、観光の集客の拡大へとつながっているところも散見されます。イベントというのは一つのきっかけに過ぎなくて、決して目的ではなく、ある意味では手段でありますから、その魅力を集中的に情報発信して周知していく、そしてまた次につなげていくということを目指すのがイベントだと思っていますので、また次なる機会に向けて案を練っていききたいなとも思っています。

2年前は南予中心でありましたが、今年度は島という同じように地理的なハンデキャップを抱えている島しょ部をテーマにいたしまして、瀬戸内しまのお2014が開催されていますけれども、趣旨は全く同じであります。島の持っている魅力と、南予地域が持っている魅力がまた全然違うので、同じ県内でもこれだけ多様性に富んだ魅力を抱えているのが、我々のふるさとの愛媛県であるということを改めて痛感しています。

【まちの魅力の再発見】

自分自身も松山で市長という仕事をいただいていた時、11年間行政の仕事をしておりましたが、市町の場合は住民により身近な役所がありますから、日々住民の皆さんの中に飛び込んで、まちづくりであるとか、そのまちの魅力の再発見であるとか、あるいは身近な福祉教育、こういったものに対するサービスをどうするか、そんなことを日々行ってきました。そんな中で、坂の上の雲のまちづくりというものを行ったことがございました。その時に、愛媛県のことは大体知ってるんじゃないかなと感じていたんですが、そうではないというのが率直な今の感想であります。3年半県の仕事やらせていただきました

けれども、特にいやし博の時は南予地域によく足を運ばせていただいたんですが、訪れるたびにそれぞれの地域で再発見がある、新発見があると言っても良いと思いますけど、そんなことの繰り返しでありました。

【東・中・南予の特徴及び広域連携】

御案内のとおり、愛媛県は東予も中予も南予もそれぞれ主要な産業が異なります。特に東予はものづくり産業がメインでありまして、四国中央市の紙パルプ産業から始まり、新居浜市は住友発祥の地としてのものづくり産業、西条は先端産業の工場群、そして今治は造船、タオル、海運と、松山エリアは化学繊維を中心とした工場群と、こういったものづくりが中心なのが東予の魅力でございます。実際のところ働いてる方の75%が2次産業に従事されているそうです。中予は、松山市が商業都市でありますからサービス業が中心で、働いてる方の82～83%が3次産業に従事されているということでもあります。そして南予は何と言っても1次産業が中心でありまして、農業、林業、水産業、こうしたところに従事されている方が85%と。

ひとつの県で三つのエリアの中に、これほどまでキャラクターの違うエリアが存在し、バランスを保って歴史を積み重ねてきたというのは、全国見渡しても愛媛県以外には見当たりません。ただ、これこそが愛媛の強みであると同時に、仕事をしながら感じることは、意外と横の連携がないということでございます。それは、広域な行政での連携もさることながら、今の1次、2次、3次の中での業界における横の連携というのも今まではあまりなかったのかなと、そんなことを感じる時があります。でも、今の時代というのはそれぞれが発展していますから、実は1次産業と2次産業が結びつくことによって生まれてくる価値、これは、フロントエンド商品につながることもあれば、その技術がコストダウンにつながることもあり、いろんな面でのメリットがあるはずだと思います。いわば、横の連携というものが、これからの一つ課題なのかなということ、県の行政をしながら感じてまいりました。

また、市区町村も、市単位、町単位という縦割り意識が非常に強いので、例えば観光をする時、いやし博もそうなんですけど、複数でやった方が情報発信力、それからコンテンツのメニューも広がることは自明の理であります。例えば、今広島県と共同で瀬戸内しまのわをやっていますけども、広島県側からはもちろん広島の情報発信もしますが、愛媛の情報発信も担っていただいている。愛媛側からは愛媛の情報発信をしていますけども、一緒になって広島の情報も発信している。となると、情報発信力は組むことによって、自動的に2倍3倍になっていくわけですね。当然のことながら、受け手側に入ってくる回数も増えて、そして濃くなっていきますから、この情報発信力というのは、広域の横串の連携から生まれてくるものだとことを痛感しています。是非今日は、そんな広域の視点での議論ができたかなと思っています。

【地域経済活性化による雇用の創出】

さて最近、産業の振興というものを一つのポイントに掲げさせていただいています。なぜかというと、福祉を充実したい、教育を充実したい、これも大事なテーマであります。しかし、その充実のためには、どうしても地域経済の活性化が必要であると思うからであります。地域経済が活性化できないと雇用の場所がなくなる、雇用の場所がなくなるということは、人が外に流出する、ということは人口は減る、当然のことながら税収も入って

きません。結果的に福祉のサービスを充実したくても、教育をさらに一層進めたくても、財源がないという悪循環に陥ってしまうということでございます。経済の活性化があれば雇用が生まれ、そしてそこから税収も生まれ、その財源を持って福祉や教育への充実へとつながっていく、こういうものだと思います。もちろん卵が先かニワトリが先か、いろんな意見があると思うんですけど、やはり働く場所があれば若者も定着してくれるわけですから、そういう観点で捉えておく必要があるのではなかろうかと思います。

【県の試験研究機関の技術】

愛媛県にはいろんな宝物がありますけれども、県の職員もいろんな面で力を発揮してまして、それは、それぞれの地域に分散して存在する研究所の存在であります。これはあまり気付かれないんですけど、例えば、今年農林水産研究所で、11年かかりましたが、新種の花の開発に成功いたしました。愛媛でもいろんな地域で花き栽培やっていますけれども、やっぱりヒット作が欲しかったんですね。それをどこに求めたかという、デルフィニウムという品種になります。デルフィニウムという、大体青であるとか、せいぜい白が中心だったんですが、ピンク色のデルフィニウムが作れるかどうか、そこにチャレンジしてもらってきました。ようやくこれが成功しまして、できてみたらびっくりしたんですけど、まるで桜と見間違えるような花の形、色でありました。そんなところから、瞬間的に「さくらひめ」という名前にしたんですけど、これを今年全国の品評会にどんどん出しているんですが、どこへ出しても全国チャンピオンになるんです。もう三冠王を取りました。非常に注目されていまして、この品種が拡大していった場合、花き栽培に新たな収益源が生まれていくということにつながると思います。桜は4月ですけど、このデルフィニウム桜のような花が、12月にも採れ、3月にも採れ、4月にも6月にも採れる。あとは、ちょっと暖かくなると難しいので、ちょっと涼しい北海道と連携して周年供給体制ができないか、今そんなことも試験的、水面下で進めているんですけども、一つの成功例がこの花の新品種の開発であります。

また、畜産研究センターというのがありますけれども、こちらは愛媛県の畜産農業を支えています。数年前に開発された「媛っこ地鶏」というのが、一昨年全国番組の「どっちの料理ショー」で日本で最高においしい地鶏と紹介された瞬間からオーダーが殺到していきまして、徐々に拡大して、今ようやく年間7万羽の生産ができるようになりました。10万羽まで突破すると、全国10種の生産量の地鶏に入りますので、なんとかそこまで早く持っていきたいということで、関係者と取り組みを進めていますけど、全く値崩れがしません。大体1羽当たり、コスト的には飼料代、ヒナ代全て合わせて1,900円ぐらいかかるとは思いますが、媛っこ地鶏に関しては売り価格は、3千円を超えるものになっていますから、その分しっかり育てればしっかりと収益が上がるという品種の開発につながりました。

あるいは、同じ畜産研究センターでは、愛媛甘とろ豚という豚が今全国から注目していただいています。おいしいがゆえに、売っていった場合に実績にすぐにつながります。昨年は、自分自身が大阪の阪急百貨店というところに売り込みに行ったんですけど、ともかく一緒に食べましょうと言って、その場で食べていただいた結果、「これは扱いたい」と決ましまして、一昨年の10月からは、阪急百貨店は大阪を中心に7店舗ありますけども、豚肉コーナーで愛媛甘とろ豚の取扱いが始まりました。現在こちらは年間5千頭ぐらいに

なってるのかな。1万頭あたりをまず当面の目標に生産の拡大に入ってます。さらに来年には、鶏あり豚ありだったら牛だということで、研究所の方に今開発を依頼していますけども、これも他がやっていることを後追いしても全然収益につながらない、今からサシの多い肉を開発したって松阪牛や神戸牛の上にいけるわけではないので、消費者の心理が変わっているところに着目し、赤身を中心とした黒毛和牛、あか牛というのはあるんですけど、黒毛和牛を使った赤身というのは今までどこも開発してないので、今この開発に入っています。来年ぐらいには出荷できる体制ができるのではなかろうかと思っておりますけども、こうした技術者の研究がその産業の振興につながるということでもあります。

ものづくりでも、四国中央市には紙産業技術センターが紙パルプ産業を支えています。今治では繊維産業技術センターが今治タオルを支えています。また中予では窯業技術センターが砥部焼等々の伝統工芸を支えています。そしてまた久万高原には林業研究センターがありますが、これが「媛すぎ・媛ひのき」を始めとする愛媛県の林業の技術面、あるいは製品面の開発の支えになっています。

さて、そこで宇和島圏域はどうかというと、二つ研究所があります。その一つが吉田にあるみかん研究所であります。そしてもう一つが、宇和島市にある水産研究センターであります。この二つが愛媛県の果樹、それから海面養殖魚の技術面の支えの役割を果たしていきまして、日々研究を積み重ねているところでございます。

既に愛媛県の柑橘出荷量は全国1位になってはいますが、その強さというのは量だけでなく、品質、それから多品種にあります。周年供給で様々な品種が作れるということが愛媛県の持ち味であって、特に南予地域はいろんな品種を作っていただけてますけれども、極早生から早生になり、通常の温州みかん、そして最高品種の紅まどんな、年が明ければ伊予柑が出てくる、あるいはせとかが出てくる、清見が出てくる、その他にも最近では甘平という新しい品種も出てまいりました。4月あたりになりますと、カラマンダリンが良い値で評価されていますし、また5月、6月になってくると河内晩柑が出てまいります。そして宇和島では最近ブラッドオレンジという高級品種も注目を集めるようになってはいますが、この開発をしているのがみかん研究所であります。みかん研究所の役割というのは、愛媛の果樹農家の収益を上げるために良いもの、食べやすいもの、作りやすいもの、またコストを低減する技、こういったことを積み重ねて果樹農業への振興につなげていこうというのが役割であります。

もう一つが水産関係でありますけども、天然魚ももちろんおいしいですが、最近では愛育フィッシュという命名をさせていただきましたが、海面養殖、これについて力を入れているところでございます。意外と知られていませんけども、海面養殖魚は47都道府県中愛媛県が第1位であります。2位が鹿児島、3位が長崎というような状況でありますけども、この海面養殖魚の下を支えているのが、当然のことながら水産研究センター、それから愛南町にある愛大の研究センターがタイアップしているというところが、一つの強みになっていると思います。鯛とハマチが中心でありましたが、今はどうやって付加価値を付けられるか、5億円規模の売り上げにつながってきたのが、みかんフィッシュであります。みかんの皮を餌に混ぜることによって、とりわけブリ、ハマチの臭みを消すということに成功いたしました。これをどう売るかはこちらの仕事でありますから、現在は全国の回転寿司チェーンにルートができましたので、ここが宇和島みかんブリという名前を出したら、

これが非常に当たりまして、特に脂の乗った臭みのないブリ、ハマチを食べたいという、今まで敬遠していた女性層がこれに非常に反応を示して、売り上げにつながっているというのが現状でございます。

また、新魚種につきましては、これまでもマグロ、マハタ、クエ、ウマズラハギ等々の品種開発に成功してきてますが、今期待しているのがスマという品種でありまして、これはマグロとカツオの間ぐらいの魚種だと思いますけども、養殖はどこも成功していません。トロ成分が非常に多い魚でありまして、マグロだとそれこそ30キロ40キロの世界になりますけども、スマは大体3〜4キロで出荷できる、ということは大型店以外の小さなお店でも扱える大きさの、マグロに限りなく近い、トロに限りなく近い魚肉ということで、もし開発に成功すれば、愛媛の養殖魚の新たな収益源になっていくのではなかろうかと思っています。

こうしたことはあまり知る機会がないと思いますので、研究所というのが、技術というものがいかに大事かというのをちょっとでも知っていただけたらと思いますし、そこにこそ愛媛の今全国でも注目されるような産業の育成につながった背景があるということ、皆さんと共に共有できたらと思っています。

【宇和島圏域各市町の魅力ある観光振興】

さてこの宇和島、愛南、鬼北、そして松野でありますけど、当然のことながら1次産業というものが大事でありますから、それは後程やり取りの中でお話しさせていただきたいと思いますが、もう一つはやはり観光振興ということを考えなければなりません。およそ一つのエリアを活性化させるためには、その地域にあるものを外に向かって売るか、あるいは外から人に来ていただいてお金を落とすとしていただくか、究極的にはこの二つの方法しかないわけでありまして。

その中で、後者の重要な役割を担うのが観光振興になるわけでありまして、ただ観光振興というのはどこの地域でも取り組みますから、すさまじい競争であります。だからこそ戦略をきちんと立てなければ、人を呼び込むことができないと思います。そんなところから考えていくと、南予地域というのはまだまだ伸び代があるといっても間違いありません。

前回のいやし博の時でも、本当に記憶に残っている、都会から誰を呼んでも満足してくれるだろうなというメニューがてんこ盛りでありました。愛南に行った時、シーウォーカーで海を歩いたあの美しさであるとか、高茂岬の風景は絶景でありましたし、とりわけすぐに血抜きをして氷詰めにするびやびやかっおのおいしさなんていうのは、この地域でないと味わえないというものでありました。また、松野では本当に恐ろしくて、僕はそういうのが得意ではないんですけども、滑床溪谷のキャニオニング、これは若い女性は間違いなく食いつくと思います。今も大阪あたりからどんどん来てるようで、いやし博の時は1,300人ぐらいだったんですけど、今は2,000人を超える予約が入っているそうです。雇用も二人か三人雇って、正式に観光ビジネスにつなげるような仕組みができたようでありまして。

それから、鬼北ではやっぱり成川の木材体験なんかはこれもまた忘れられませんし、特にキジ肉というのは今力を入れているというところでもあります。また、鬼北といえば柚子、この前も宇和島が実施した地にぎりコンテストで柚子皮にぎりが1位に輝いていましたけ

れども、ただ、皆ほとんど作っては高知に出荷しているだけで、もったいないなど。ここでのブランド製品というものがなかなか見い出せてないという悩みもあるということを知っていますので、そのあたりもこれからの課題になってくるかなと思っています。

宇和島は何ととっても伊達の歴史、これは宇和島市の話だけではないですけど、宇和島伊達家の先見性というのは、歴史通から見れば垂涎の的でありまして、あの時期に本当にどこにも手を出さなかった先駆的な取り組みをしてるといのはびっくりしました。また、伊達家所有の宝物、素晴らしいものがたくさん眠っているということもいやし博の時に知りましたので、どうやって生かしていくのかというのはこれからの大きな課題でもあろうかと思えます。

【宇和島市吉田町の活性化事例】

何年前か、いやし博の時でしたけど吉田町に行ってみてまいりました。この吉田町は御案内のとおり、高速道路が通ったことによって車の交通量が激減しました。そのことがやたらめったらニュースで流されて、いやし博開催の一方で、そんな負の影響が出ているんだという象徴的な町としてニュースで取り上げられることがありました。そのニュースを見て、こういう時こそいろんな議論をしないといけないなと思って、吉田町にあえてその時行ってみたくてです。町をどうしたらいいかというような思いを持つ町民の皆さんが300人近く集まりました。最初は「もう駄目なんだ。どうしようもない」という空気だったんですけども、まちづくりというのは下向いたって良い結果なんか生まれるはずがなく、こういう時だから切り替えようという呼び掛けをしました。

その場で最初に良いアイデアがあったわけではなかったんですけども、そもそも吉田町自体が初代の伊達当主が隠居した後、吉田伊達藩ができたわけですけども、吉田に行って吉田伊達藩の歴史をどこへ行ったら味わうことができるかと考えると、ないんですよ。逆に言えば、掘り起こすものがいっぱいあるんじゃないですかねと、吉田藩が積み重ねた歴史は古いんだからこそ、いろんなものが残ってるはずなんだけど、それがまちづくりに生かされてないというのはもったいないんじゃないかな、というような話をしてたんです。

すると出席者の中から、実はこういうものがあるんだって見せられたのが絵巻物でありました。絵巻物には旧吉田藩時代に行っていた「おねり」の記録がダーっと書かれているんですね。毎年一度、お祭りで細々と「おねり」をやっているんだという話聞いたので、これこそまちの魅力でしょと、やりましょうよ、大々的に復活しましょうや、という話で最後盛り上がり帰ったのがその時の対話集会だったんです。間髪入れずに、県の方で、もし住民の皆さんが立ち上がった時は応援しようということにいたしました。

まちづくりというのは、基本は住民が主役で、行政参加が理想であります。決して市民参加ではありません。市民参加というのは、行政主体だから市民参加になってしまうんですね。これは、松山市長時代のまちづくりで一番肝心なことだったんです。行政主体の市民参加では、誰も責任感を持ってくれません。むしろ行政が言ってきたからやらなきゃいけないと、やらされ感が面白くないです。でも住民主体の行政参加になった場合は、全く動きが変わってきます。自分たちが決めて立ち上がったんだから、最後までやらなきゃ、責任感がずっしりと重くなり、かつ、行政も支援のしがいがあって、それがうまくかみ合っていくものだと思います。

そこで吉田町の動きを見ていたんですが、本当に立ち上がったんですね。「おねり」の復活のために募金活動をしようとか、いろんな動きが出てきました。ここはスイッチを押す時だということで、県も全面的に協力をするという体制を取って「おねり」が復活をいたしました。1年後その行列が復活をするという、あとはこちらがいろんなところに仕掛けをしていくんですが、今日マスコミの皆さんも来られてますけど、マスコミの知る範囲の皆さんに、皆さんのテレビや新聞で吉田は交通量が減って駄目だ、駄目だと、マイナスのイメージのニュースをいっぱい流していたという過去があるので、むしろこれだけ頑張ってるんだから、それを取り戻すニュースを是非流してあげて下さいと、流したくなるような動きが出てますと。実際に皆さん足を運んでみてください、そしたら思わず書きたい、取り上げたくなるはずだと。ほとんどのテレビ局、新聞が取り上げてくれました。募金を集める姿、その「おねり」を復活させる作業、歴史を皆で共有しながらどういう行列にしようかという打ち合わせのシーンとか、いっぱい出てました。

連絡がきまして、「あんた、こういうの最初に刺激与えたんやけん、祭りには絶対来いや」と言われたので行ってきました。1年前のお祭り比べると3倍の人がそのお祭りに訪れていましたけれども、打ち上げではそれぞれの地区に分かれて大盛り上がりになっていましたが、そこにはもう後ろ向き、下向きの空気はなかったです。来年はどうしようと、もう既にそんな話し合いをしていました。確かに厳しい現実はあるんだけど、こうした伸び代がある、そして素材が良い、ここは絶対に南予は自信を持っていただきたいなと思いますし、その中から出てくる自主的な活動に対しては、我々も全力で行政参加しながら一緒になって盛り上げていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

ちょうど30分たちましたのでお話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。